



昭和五十八年三月五日

松江市立法吉小学校
校歌
愛唱歌制定

法吉教育会

あいさつ

法吉教育会会長 光 田 功

昭和五十六年四月に開校した法吉小学校は、新設校としての物心両面にわたる条件整備が、着々と進められてつあります。

しかし学校の象徴として校歌は、開校当初から望まれつつも、その制定は延引されておりました。

わたしたちは現今の社会情勢を鑑み、児童の健全育成の重要なことを認識して、去る昭和五十七年の秋に「法吉教育会」を設立いたしました。その最初の事業として先に述べた事情から、法吉小学校の校歌並びに愛唱歌を制定することといたしました。

幸い、立派な作詞者、作曲者が得られて、このたび制定の披露式が挙行される運びとなりましたことを、御同慶の至りに存じます。

どうかこれを機とされ、更に法吉小学校教育が充実、発展することを祈念し、御挨拶といたします。

お礼

法吉小学校校長 田 部 保 富

このたび法吉小学校の校歌と愛唱歌が「法吉教育会」の事業として制定され、学校が頂くこととなりました。校歌は小・中学校を問わず、多くの学校にあって、学校の行事等には必ず歌われます。また卒業生が母校を偲ぶとき、これまた校歌を思い出して歌うという御経験の方も多いことと存じます。このことから、校歌は学校を象徴するものであり、ゆえに、その学校に学んだ者の心の中にいつまでも存在する、学校にとって極めて大切な「精神的資産」と申せましょう。

ここに法吉小学校を象徴するにふさわしい校歌と、学校と最も関係の深い、法吉の里を歌った愛唱歌を頂き、深謝申し上げます。

皆様の、学校に対する御期待の表われとして、職員共々にいっそう法吉教育に尽すいすることをお誓いして、お礼の言葉といたします。

法吉小学校校歌

詞 藤 久 稔
曲 小 林 昭 三

一

佇^たつ丘^{おか}は
山^{やま}ふところよ
かぐわしく
風^{かぜ}はさわたり
ぼくたちの
わたしたちの
法吉小学校
おおらかに育^{また}ちゆく

二

澄^すむ天^{そら}は
ひらく未来^{みらい}よ
うららうらら
光^{ひかり}はみちて
ぼくたちの
わたしたちの
法吉小学校
ゆたかに学^{まな}びゆく

法吉小学校愛唱歌

四季の池

詞 藤 脇 久 稔
曲 小 林 昭 三

春 法吉の里の
あけぼのは
ほのぼの智者ヶ池 久米池
はうほ けきよ けきよ
鶯の谷
宇武賀比売よ法吉鳥

夏 黒田の里は
入道雲
湧く清水池 白岸池
水すまし すいすい
雲にまたがる
水の輪天の涯までも

秋 春日の里に
月芽える
うかぶ田原池 洗足池
とっこ とっこ
はらりとみじ
親鹿仔鹿 沢わたる

冬 比津の里は
雪明り
こおる滝戸池 追田池
はたり はた はた
耳をすませば
滝戸の波が寄せかえす

補 註

法吉・鶯の谷 千二百年まえに成った地誌、出雲風土記に「神魂命の御子宇武賀比売命、法吉鳥と成りて飛び渡りて、比の処に静まり坐しき。故、法吉と言ふ」とあり。また「ほふきどり」とはホウ（フ）ホケキョの鶯のこと、鶯谷が「飛び来り静り坐し」た処とされま

す。古くはここに宇武賀比売命を祀る法吉神社がありました。「ハマグリがウグイスになった」の伝説は、「湖の水がひいて、陸地になった」という土地の成りたちを語っているように思われます。

宇武賀比売 古事記には、大国主命が伯耆国の手間の山本で、兄の八十神たちに「火を以ちて猪に似たる大石を焼きて」焼き殺されたとき、蛤貝比売が「母の乳汁と塗りしかば、麗しき丈夫に成りて、出で遊行き」とあります。宇武賀比売はハマグリを人に見たてて言ったものです。古代には、ハマグリを粉末にして乳状に練り、外傷ややけどの薬にしたといひます。

春日 田原谷に春日明神が祀られてあったことに由ります。この社は、四百年まえ、松江開府にあたり奥谷の現在地へ遷りました。しかし田原神社、と旧の所在地名が社号です。遷座に際し、分霊をとどめました。それが春日の須賀神社です。

田原池 田原谷のかたわらの池。池の北側、城北小学校の北側の坂道（春日——東奥谷）は田原越といひます。

洗足 白鹿山から現われた白い鹿（後述）が、足を洗ったとされる「鹿の足洗い池」があったそうです。池は埋まり、そのあたりを洗足と呼ぶようになりました。

親鹿仔鹿 田原谷へは年に一度、北の山から白い鹿が現われました。すると村人は「日を

定めず」その日を祭としました。「年ごとの今日の祭を告る鹿に月の白木綿かくる氏人」の古歌が伝えられます。その白い鹿の棲む山を白鹿山といひ、南側の小ぶりの山を小白鹿といひます。なお西に秋鹿の地名があるように、北山一帯には鹿が多く棲んでいたようです。

白鹿山は真山とともに、戦国時代には尼子方の城となり、毛利方と攻防をくりかえしました。三ヶ月に向ひ「我に七難八苦を与へ給へ」と祈った山中鹿介幸盛も、ここに拠ったこと

でしよう。山には幾段もの平があり、馬場、水の手、などの名が残ります。

沢わたる 土地が低くて、浅く水がたまり、蘆など水草が生えている処が「沢」です。前述の鹿の足あらひ池・洗足の名は、このあたりが歩いて渡れる沼沢地であったことを表わしており、湖の渚（またはその名残り）であったと想像されます。

愛唱歌では「池」を「沢」に置きかえて、白い鹿の姿を思い浮かべました。

黒田 土が黒っぽいところからの地名のようです。地下には泥炭層があり、大正末期まで石炭が採掘されていました。この芹の栽培は、凡そ三百年まえから盛んに行なわれるようになりました。

旧法吉小学校は、明治六年、黒田村尋常小学校として発足しました。

比津 比津の「津」は、藤津のそれと同じく「舟つき場」の意で、この辺まで宍道湖が入りこんでいたのでしょう。校下には、沢分、深坪など、水にちなむ地名があれこれあります。海や湖が陸地に入りこんだところを江、入江といひ、「長い入江」になっていたところが長江です。松江は、松の多い入江、の意です。

滝戸池 池の底が、加賀の滝戸に通っていると伝えられます。出雲風土記は「加賀の滝戸の中を、枳佐加比売命が弓箭を射通したとき、佐太の大神がお座れになった」と伝えます。キサカイヒメは赤貝を人に見たてたものです。

法吉小学校校歌

詞 藤脇 久後
曲 小林 昭三

Moderato いきいきと

(部分=部合唱)

D.S.

法吉小学校愛唱歌

校下用辺池づくし

たのしく めれて

mf

詞 藤脇久枝
曲 小林昭三

1. ほっきのさとは あけほのは -
2. くらだのさとは にゅうどぐも -
3. かすかのさとは つきさえる -
4. ひーずのさとは ゆきあかり -

mf

あけほのは 朝ほのちがひけ くまのけ は - は
にゅうどぐも わくしみずいけ びげしけ みずす まし
つきさえる 30ふたわらいけ せんごうけ と ニ
ゆきあかり 30るたきどいけ さにたけ ほ たり

mp

mf

f

けけけけけ うぐいすのた に うもかいぬめよ
すいすいすい くもにまたか る みずのめてんの
とこととこと はかりとちみ ぢ おやいかいじか
ほたほたほた みみそすませ は くけどのなみか

cresc.

f

ほうきどり
はてまでも
さわわたる
よせかえち

mf

mp

mf

mp

f

D.S.